

## オスカー・ワイルドとコナン・ドイル作品における ジャーナリズムと真実

緋田 亮

「ワイルドさん」と[ワトスン]博士は言いました。「御明察、感服の  
いたりです。しかし、私の場合には、あてはまりません。私は芸術家  
ではない。私は、自然をかえたことなどありません。それどころか、  
私は、平平凡凡と、写実に徹したいと思っています。それがいちばん  
性にあっているのですよ」

「こいつはすごいや!」と、ワイルド氏はフランス語で言いました。  
「あなたは骨の髄まで芸術家ですよ、博士。あなたのいだいている幻  
想は、典型的な芸術家の幻想です。ちょうど根っからの嘘つきが、自  
分でもほんとうのことを言っているような錯覚におちいるのとおなじ  
ようにね。・・・」(デュトゥール141)

ジャン・デュトゥールの小説『ワトスン夫人とホームズの華麗な冒険』  
(Jean Dutourd, *Memoires de Mary Watson*, 1980)の中では、オスカー・ワ  
イルド(Oscar Wilde, 1854-1900)がシャーロック・ホームズやジョン・ワトス  
ンと出会って言葉を交わすだけでなく、ホームズを題材とした探偵小説を  
書くべきだとワトスンに勧めたのがワイルドであるという設定になってい  
る(137-38)。言うまでもなくワトスンやホームズは架空の人物であり、実  
際ワイルドと出会うことはなかった。しかしその生みの親であるサー・  
アーサー・コナン・ドイル(Sir Arthur Conan Doyle, 1859-1930)は、1889  
年8月30日、「リピンコッツ・マンスリー・マガジン」(*Lippincott's Monthly  
Magazine*)の編集者ジョセフ・ストダート(Joseph Marshall Stoddart, 1845-

1921)から夕食に招かれ、そこでワイルドと出会っている。

二人の作家の出会いの場が、ジャーナリストによってセッティングされたものであること、またその会食の結果生み出された作品が月刊誌という形で読者に提供されたことが象徴するように、彼らが生きた時代はまさにジャーナリズム隆盛の時代であった<sup>1</sup>。数々の新聞や雑誌、そしてジャーナリストと関わりながら彼らが活動をしていた環境に鑑みると、両作家が「ジャーナリズム」を作品中のトピックやテーマとして取り上げていることはごく自然なことである。またジャーナリズムとは切り離せない「真実」というキーワードを經由して比較をすると、彼らの作品の性質や芸術観の違いが浮き彫りとなる<sup>2</sup>。本論考では、まずワイルドとドイルがどのようにジャーナリズムと関わっていたかを簡単に紹介する。そしてドイルの小説『失われた世界』(*The Lost World*, 1912)と『霧の国』(*The Land of Mist*, 1925)、ワイルドの「嘘の衰退」(‘*The Decay of Lying*,’ 1889)、「芸術家としての批評家」(‘*The Critic as Artist*,’ 1890)などの批評に触れながら戯曲『真面目が肝心』(*The Importance of Being Earnest*, 1895; 1899)を取り上げ、両者のジャーナリズムや真実の捉え方の違いについて比較・考察する。

\*

ワイルドとジャーナリズムの関わり方は多岐にわたり、研究者も先行研究で取り扱っているため、ここでは書簡を用いて彼のジャーナリズム観の一端を確認するに留める<sup>3</sup>。ワイルドは1887年頃の書簡でこれまでの活動を尋ねられた際、*the Pall Mall Gazette*, *the Saturday Review*, *the Athenaeum*, *the World*, *the Fortnightly Review*, *the XIXth Century*, *Macmillan's Magazine*などに寄稿してきたと答えているように、彼の活動は数多くの雑誌や新聞と関わりを持っていた(Holland 293)。しかし、同じ書簡で“I write only on questions of literature and art — am hardly a journalist”と述べているように、ジャーナリズムに寄稿することとジャーナリストであることはワイルドにとっては同義ではなかった。また1890年の書簡に“My dear sir, I send you the general outlines of my biography[.] [ . . . ] I have no claim to be regarded as a journalist, as all my work is literary criticism — I notice books, not events.”と書いているように——ワイルドが受け取った手紙で“journalist”だと呼ばれ

ていたことが推察される文面である——出来事についてものを書く職業であるジャーナリストと、文学や美術に関して批評をする寄稿者は、はっきり区別されている (Holland 457)<sup>4</sup>。

幸か不幸か、このようなワイルドの自己認識と周囲の認識は必ずしも一致しているわけではなかった。1894年の「イラストレイティッド・ロンドン・ニュース」(*Illustrated London News*)に掲載された記事では、ワイルドの作家としての能力を認めながらではあるが、ワイルドがジャーナリズムへと逃げていったという指摘がなされている。

Mr. Oscar Wilde has betaken himself to journalism. He has written in the *Saturday Review* a series of those epigrams the recipe of which he has not been able to retain for his exclusive use [. . .]. [. . .] Mr. Oscar Wilde is really capable of better things, and he should leave his topsy-turvy inanities to the parodists and farce-writers. (Anonymous, “Anecdotal” 678)

この記事における「ジャーナリズム」と言う表現は、彼自身が言うところの「ジャーナリズム」とはおそらく異なるが、ワイルドがジャーナリズムに接近していった姿を当時の雑誌が取り上げている点は興味深い。現代のワイルド研究においても、2017年に出版された *Journalism and the Periodical Press in Nineteenth-century Britain* で John Stokes と Mark W. Turner は、ニュージャーナリズムが彼の批評スタイルを作り上げる一助となったことを指摘しながら、“new journalist”としてのワイルド像を論じている。

一方のドイルは、ワイルドほど雄弁にジャーナリズム/ジャーナリストという概念について語ってはいないものの、生計を立てるため、そして文学の道を切り拓くための媒体としてジャーナリズムを積極的に利用していた。例えば1882年頃の書簡では、*Temple Bar*、*All the Year Round*、*Journal of Photography*、*Punch*、*Chambers'*などの雑誌に短編を投稿しながら生活を送っていると母親に報告をしている (Lellenberg 171)。その影響もあり、ドイルは正統な作家・芸術家というよりも、ジャーナリズムと強く結びついた短編作家といった評価を受けていた。1908年の *The Academy* の記事は、“Sir Arthur owes himself to the great nineteenth-century snippet movement. If

it had never occurred to a Mr. George Newnes, [...] we should probably have heard[...] nothing at all about Sir Arthur Conan Doyle.”と書いている。ヴィクトリア朝後期からエドワード朝にかけて活躍し、ニュージャーナリズムの発展に大きく寄与した出版・編集者George Newnes (1851-1910)の名前を挙げながら、ドイルの存在が当時のジャーナリズムに大きく支えられていたことを明らかにしている。その記事は続けて、“We are quite prepared to admit that Sir Arthur Conan Doyle is an artist, but the real truth about him is that he is a *Tit-Bits* artist.”と書き、センセーショナルな new journalism と親和性のあった週刊紙「ティットビッツ」(*Tit-Bits*)と絡めてドイルの芸術性の低さを揶揄している(Anonymous, “The Trepid Tales” 391-92)。

本人だけでなくドイルの作品もジャーナリズムの攻撃の対象となった。1892年の「アイドラー」(*The Idler*)にはシャーロック・ホームズ作品のパロディが掲載されている。話の筋としては、探偵Sherlaw Kombsが列車内で男性が死亡した事件の調査を依頼され、様々な状況から事件の真相は男性の自殺だと推理するも、実際は殺人であったことがわかり、タイトル“Detective Stories Gone Wrong”が示すようにKombsが晒し者になるという物語である。このパロディ作品が興味深い点は、ジャーナリズムと文学が絶妙に入り混じり、そこにホームズ/ドイルが取り込まれていることである。Watsonによって語られる作品の冒頭、“Dropped in on my friend, Sherlaw Kombs, to hear what he had to say about the Pegram mystery, as it had come to be called in the newspapers”とあるように、実際のいくつかのホームズ作品同様、新聞によって事件のきっかけが提示される(Sharp 413)。このPegram mysteryに関する相談を持ちかける依頼人はWilber Scribbingsという名の人物であるが、彼は*Evening Blade*という新聞を発行する新聞社のジャーナリストだという設定になっている。依頼人は“The *Evening Blade* wishes you to investigate, so that it may publish the result. It will pay you well.”と述べ、Kombsが事件の調査に取り掛かる(417)。しかし、先に述べた通り、Kombsは真相解明に失敗する。その失態は*Evening Blade*を通して、一時的ではあるがロンドン中に知れ渡ることになる。“Journalistic London will not soon forget the sensation that was caused by the record of the investigations of Sherlaw Kombs, as printed at length in the next day’s *Evening*

*Blade*” (423).

このパロディ作品を取り巻く多層的なジャーナリズムと文学の環境——新聞で報じられた事件の依頼をジャーナリストがKombsに持ちかけ、その顛末を新聞が報じる、という物語を月刊誌 *Idler* が掲載したこと、またその物語を書いた Luke Sharp は、*The Idler* の発刊当初、ジェローム・K・ジェローム (Jerome K. Jerome, 1859-1927) とともに共同編集者を務めていたロバート・バー (Robert Barr, 1849-1912) のペンネームであり、作品タイトルの下に “With apologies to Dr. Conan Doyle, and his excellent book, ‘A Study in Scarlet.’” と添えてあること——は、いかにドイルがジャーナリズムと密接に活動していたかということを示す好例であると言える<sup>5</sup>。

\*

実際に両作家の作品の中で「ジャーナリズム」がどのように機能しているかについて考察するにあたり、まずドイルの『失われた世界』を取り上げる。これはチャレンジャー教授を中心とした小説であるが、主人公の一人であるマローンの職業がジャーナリストであるということもあり、全編を通してジャーナリズムに対する言及や関心が強くみられる。語り手がマローンすなわちジャーナリストであるこの小説の冒頭で、力強く描き出されるのはジャーナリストおよびジャーナリズムに対して強い偏見を持ったチャレンジャー教授の姿である。古代生物が住む土地を発見したと主張する教授——彼は “the intrusive rascals who call themselves ‘journalists’” を非常に強く警戒している人物であるが——の家を、マローンが大冒険につながる特ダネを仕入れるために身分を偽って訪れるものの、ジャーナリストだということが見抜かれてしまう (Doyle, *Lost*, 16)。その際チャレンジャー教授はマローンのことを “the damnedest imposter in London—a vile, crawling journalist, who has no more science than he has decency in his composition!” と激しく罵る (19)。なんとか難を逃れ、教授の話を書くことができたマローンは “‘It’s just the very biggest thing that I ever heard of!’ said I, though it was my journalistic rather than my scientific enthusiasm that was roused.” と、ジャーナリストとしての熱意を持って感想を漏らす (34)。ジャーナリズムに強く嫌悪感を示すチャレンジャー教授と、ジャーナリストとしての誇りを持ち

ながら教授とともに冒険へと旅立つマローンが中心となり、この物語は進んでいくのである。

『失われた世界』は、興味深い語りの構造の変化を伴う作品である。物語序盤は、ジャーナリストであるマローンが話を進めているが、彼とチャレンジャー教授を含む探検隊が未開の地に差し掛かるところで、マローンは次のような宣言をする。

And now my patient readers, I [Malone] can address you directly no longer. From now onwards (if, indeed, any continuation of this narrative should ever reach you) it can only be through the paper which I represent. In the hands of the editor I leave this account of the events which have led up to one of the most remarkable expeditions of all time, so that if I never return to England there shall be some record as to how the affair came about. (54)

物語の途中で語りの構造が「マローンが語る物語」から、「マローンが書いた文章を受け取った編集者が新聞に掲載した物語」へと変化するのである。さらに、探検隊が帰国し、世紀の大発見について会見を開く場面が描かれるが、その内容はマローンの友人が書いた新聞記事の引用という体裁をとって伝えられる。そしてその記事が終わると、マローンの語りに戻り、小説が終わりを迎える。つまりこの作品は、書き手はマローン、彼の上司、友人と変化しながらも、その全てがジャーナリストによって書かれたという設定で構成されているのである。

ジャーナリズムに支配されたこの物語世界の中の大衆は、ジャーナリズムを信頼しない存在として提示されている。マローンが上司に宛てた手紙の中で“I shall not dare to publish these articles unless I can bring back my proofs to England, or I shall be hailed as the journalistic Munchausen of all time.”と述べており、マローン自身も記録の発表には及び腰であることが示される(85)。マローンやチャレンジャー教授が無事に冒険から戻ってきた後の報告会見でも、ジャーナリストに対する強い風当たりは続く。大衆は“journalists were not averse from sensational *coups*, even when imagination had to aid fact in the process”と考えており、探検隊の誰もが必ずしも真実

を語っていないのではないかと、またそのように話を誇張する動機がジャーナリストにはある、という指摘が会見会場からなされる場面が描かれている(181)。

チャレンジャー教授は、大衆のジャーナリズムに対する不信感を体現する人物であるが、彼のジャーナリズムに対する態度の鍵となるのが、ジャーナリズムが真実を報じる機関であるかどうかという点である。物語冒頭の教授のジャーナリズムに対する高圧的な態度は、彼の科学的発見を虚言だとみなし、辛辣に揶揄したジャーナリズムに起因するが、彼は周囲が何と言おうと真実は絶対的で揺るがないものであると捉えており、次のような発言をしている。

(a) Truth is truth, and the noise of a number of foolish young men — and, I fear I must add, of their equally foolish seniors — cannot affect the matter.

(b) Truth is truth, and nothing which you can report can affect it in any way, though it may excite the emotions and allay the curiosity of a number of very ineffectual people. (44, 55)

大衆のジャーナリズムに対する不信は、報じられたことが嘘ではないかという疑いに根付くものであるのに対し、教授の不信はジャーナリズムが本当のことを報じないことに対する怒りが根底にあるという点で、多少性質の異なるものではあるが、ジャーナリズムが真実や事実を伝えるべきであるという認識は共通している。大衆には恐竜という証拠を示すことで、そしてこの冒険・発見をジャーナリズムが正しく報じ、チャレンジャー教授がマローンというジャーナリストと融和することで、この真実を伝えるジャーナリズムが達成されて物語が幕を降ろす。

『失われた世界』におけるドイルのジャーナリズムへの意識は、物語の外側でも見て取れる。この作品が「ストランド誌」(*Strand Magazine*)で連載された際、本文に挿絵や写真が添えられていた。例えば1912年5月号に掲載された写真(Figure 1)は、探検隊の面々が写ったものであるが、真ん中に映るチャレンジャー教授はドイル自身の変装によるものである。この写真を含むストランド誌に掲載された挿絵や写真についてドイルは母親宛の



Figure 1

手紙で“Do admire the pictures. The photos were all my idea and carrying out.”と誇らしげに語っている。*Arthur Conan Doyle: A Life in Letters*の編者はこれらの写真が『失われた世界』に「事実らしさ」(verisimilitude)を与えたと述べている(Lellenberg 582)。この「事実らしさ」は、連載の第一回目が掲載された1912年4月号の序文内で作者によって意図的に補強されている。その序文では、ドイルではなくマローンが挿絵や写真の提供について感謝を述べているのである。

Mr. E. D. Malone would wish also to express his gratitude to Mr. Patrick L. Forbes, of Rosslyn Hill, Hampstead, for the skill and sympathy with which he has worked up the sketches which were brought from South America, and also to Mr. W. Ransford, of Elm Row, Hampstead, for his valuable expert help in dealing with the photographs.

あたかもマローンというジャーナリストが実際に存在し、チャレンジャー教授を中心として探検隊を組み、その探検隊の写真を撮る写真家がいるかのような体裁をとって、この物語は世に出たのだ。Wongが指摘しているように、当時の読者がこれを事実だとは思っていなかったであろうが、ド

イルが作品の内容だけでなく体裁においてもジャーナリズム性を強く意識していたことは明らかである (Wong 66)。

チャレンジャー教授や『失われた世界』の大衆が抱いていたジャーナリズムへの不信感は、作品の中だけに存在するものではなく、実際に報道機関の品位に警鐘を鳴らす次のような記事は世に溢れていた。

The dignity and honesty of the Press, is a question of supreme importance to all classes of the community [...]. [...] That the press is “liable to err” is a liability which it shares in common with humanity at large. But this is a clear case for “limited liability.” We want to have this “liability” to err “limited” by thorough honesty in the editorial sanctum. (Anonymous, “Dishonest” 1)

まさにこの記事が指摘するような、報道機関の不誠実さに挑戦した作品が次に扱う『霧の国』であると言える。『失われた世界』と同じチャレンジャー教授とマローンを中心に据えたこの小説は、一般的には心霊主義に傾倒したドイルがその真実性を訴えるために書いた作品であると言われている。話の筋としては、心霊主義に懐疑的であったマローンが、交霊会での実体験や、信頼のおける心霊主義者との交流を重ねるに従ってそれを信じるようになり、否定的な大衆にもその真実性を広めようとするという物語である。本論では、作中のジャーナリズムの取り上げられ方に着目し、心霊主義という「真実」を正しく認めようとしないジャーナリズム/大衆への強い批判を表明する作品であることを論じる。

『失われた世界』と大きく異なる点の一つは、作中の“the Press represents the public”という表現が象徴するように、心霊主義をイカサマだと信じている大衆/世論とジャーナリズムがほとんど同等に扱われていることである (Doyle, *The Land of Mist*, 204)。対して心霊主義者たちはジャーナリズムに批判的であり、心霊主義が正当にジャーナリズムで扱われないことに憤りを覚えている。“The real trouble is, not that it lends itself to fraud, but that it lends itself to exploitation by that villainous journalism which cares only for a sensation” (116)。心霊主義者のみならず、交霊会で降りてきた霊も

霊媒の口を借りて、“Teach them [people] the truth! Teach it to them! Oh, it is so much more important than all the things men talk about. If papers for one week gave as much attention to psychic things as they do to football, it would be known to all” (124). と述べている。人々すなわち大衆に「真実」を伝えることの重要性を訴えていることに加え、その伝達の方法として新聞をとりあげていることは、ドイルのジャーナリズム観を探る上で示唆的である<sup>6</sup>。この作品においては、大衆とジャーナリズムが一枚岩のように心霊主義に批判的であり、心霊主義に肯定的な人々と対立をしているという構図になっている。

主人公のマローンは、物語序盤では大衆と同じ意見を持っていたが、心霊主義を信じるようになってからは、心霊主義という真実に目を背けるジャーナリズムに批判的になっていた。しかし彼自身ジャーナリストであることもあり、誠実なジャーナリズムに期待を寄せる様子が描かれる場面もある。とある霊媒の行いがイカサマであったかどうかを裁く裁判が行われ、法廷には多くの記者たちがその様子を見守っていた。マローンは、彼らは良識を持って裁判の内容を報じるだろうと信じていたが、実際は数々の“bad Press”によってその霊媒は大いに攻撃されることになる。

The *Planet*, an evening paper which depended for its circulation upon the sporting forecasts of Captain Touch-and-go, remarked upon the absurdity of forecasting the future. Honest John, a weekly journal which had been mixed up with some of the greatest frauds of the century, was of the opinion that the dishonesty of Linden was a public scandal. A rich country rector wrote to *The Times* to express his indignation that anyone should profess to sell the gifts of the spirit. The Churchman remarked that such incidents arose from the growing infidelity, while the Freethinker saw in them a reversion to superstition. Finally Mr. Maskelyne showed the public, to the great advantage of his box office, exactly how the swindle was perpetrated. (149)

マローンはこのような類の報道を“the awful sensational nonsense” (152) と呼び、心霊主義に理解を示さないジャーナリズム/世論に絶望感を覚え、“A

mad world”、“A crazy world” (205-06) と嘆く。ジャーナリズムに対する期待と絶望が繰り返し描写される点においては、『失われた世界』よりもはるかに強いジャーナリズムに対する非難が表されている。

『失われた世界』では最終的に登場人物と「真実」とジャーナリズムが融和を果たすが、本作品では「真実」の側にいる人物とジャーナリズム/大衆の間に大きな溝を残したまま物語は終わりを迎える。前者の代表であるチャレンジャー教授——彼は、娘が霊媒として数々の事実を言い当てる様子を目の当たりにし、心霊主義を否定するのをやめた——と、新聞社の上司の制止を無視して心霊主義を肯定する記事を書き続けたマローンは、世間から冷遇されることとなる。教授は、心霊主義の可能性を認める論文を「スペクテイター」に投稿すると、批評家たちの強い反発に会い、またマローンは新聞社での職を失い、フリート街全体でも孤立無援となり、誰も彼を雇おうとしない状況になる (249, 250)。その後、物語はマローンとチャレンジャー教授の娘イーニッドとの結婚の話に移るが、その結婚式にチャレンジャー教授が招待した人々は、一つの信念を持った、“the opposition of the world”によってより強く結束した“a happy crowd”のみであった (250)。マローンとチャレンジャー教授などの心霊主義者は、ジャーナリズムに代表される世間を切り離し、霧の晴れた世界——最終章のタイトルは“Where the Mists Clear Away”——で「真実」に忠実に生きていくことを決意するのである。

『失われた世界』と『霧の国』の結末の違いは、言うまでもなくドイル自身の活動の影響を強く受けている。この心霊主義小説は、1925年7月号の「ストランド誌」で連載が始まったが、巻頭言として「著者のコナンドイル卿はこの分野に関し、36年に及ぶ研究をしたという、他に類を見ない経歴の持ち主であり、[中略] この作品に描かれた、およそ信じ難い出来事や場面は、卿自身か、またはその人たちの証言が充分信ずるに値する人たちに実際に起こったものである、と卿は述べている」といった文言が添えられている (河村 253)。これは先に触れた『失われた世界』に付されたマローン/ドイルによる序文とは趣向が大きく異なる。また『霧の国』が書籍化された同年に出版された『心霊主義の歴史』(*The History of Spiritualism*, 1926) では、彼が心霊主義を宣言した媒体であるロンドン心霊主義者同盟

(London Spiritualist Alliance)の機関紙「ライト」(*Light*)からの文章を引用し、いかに世の新聞が心霊主義を不当に扱っているかについて触れている。

Of course, this whole thing [ which the newspaper reported ] is a hash of ignorance, unfairness and prejudice. We do not care to discuss it or to controvert it. It would be useless to do so for the sake of the unfair, the ignorant, and the prejudiced, and it is not necessary for those who know. Suffice it to say that *The Star* only supplies one more instance of the difficulty of getting all the facts before the public; but the prejudiced newspapers have themselves to blame for their ignorance or inaccuracy. (Doyle, *The History* 308)

ドイルを含む心霊主義者たちにとっての「真実」、そして「真実」を不当に扱うジャーナリズム/大衆に対する不満を書き込んだ小説が『霧の国』であるのだ。なお『霧の国』が出版された同年、『パンチ』は「真実」を追い求めるホームズを生み出した人物が心霊主義にのめり込んでいることを揶揄する風刺画を載せたのは皮肉なことである (Figure 2)。絵の下には“Your own creation, that great sleuth who spent his life in chasing Truth—How does he view your late defiance (O ARTHUR!) of the laws of Science?”と書かれている。



Figure 2

\*

ドイルが霧を晴らそうと取り組み始める30年ほど前の1891年、ちょう

ど『ドリアン・グレイの肖像』(*The Picture of Dorian Gray*, 1890; 1891)をめぐる論争が過熱していた時期に、ワイルドはドイルにこのような手紙を書いている。

Between me and life there is a mist of words always. I throw probability out of the window for the sake of a phrase, and the chance of an epigram makes me desert truth. Still I do aim at making a work of art, and I am really delighted that you think my treatment subtle and artistically good. The newspapers seem to me to be written by the prurient for the Philistine. I cannot understand how they can treat *Dorian Gray* as immoral. (Holland 478)

この手紙にはドイルとワイルドの共通点と相違点をはっきりとあらわれている。前者はドイルと同じようにジャーナリズム/大衆に対するある種の不満を抱くさま、そして後者はドイルが重視していたと考えられる“probability”や“truth”は投げうって、言葉を優先している態度である。そしてこれらは、同時期にワイルドが書いた批評の中で主張されていることと大きく重なり合う。

「虚言の衰退」では、ヴィヴィアンが“Newspapers, even, have degenerated. [...] It is always unreadable that occurs.” (Wilde, “The Decay” 75) と、「芸術家としての批評家」ではギルバートが“Oh! journalism is unreadable [...]” (Wilde, “The Critic” 135) と嘆き、ジャーナリズムへの不満をはっきりと表明している。ワイルドの人生を辿ると様々な要因が挙げられるが、その不満の一端は、大衆と報道機関が道徳的な価値ばかりを重視して芸術の真の価値を認めないことにある。「社会主義下の人間の魂」(“The Soul of Man,” 1891) ではそのような大衆が、彼らの媒体である報道機関を通じてなされる“the public, through their medium, which is the public press”、芸術作品への的外れな認識を示している (Wilde, “The Soul” 252)。建設的な文芸批評が交わされ、ワイルド自身も文芸活動を行なった“higher journalism”はこのような批判の枠外にあることは明らかであるが、芸術や美に理解を示さないジャーナリズムや大衆には嫌悪感を示していた (Sturgis 328)。

芸術としての価値を持つ嘘や文芸批評の重要性を論じるこれらの批評の中で、ドイルあるいは“Truth is truth”と言い切ったチャレンジャー教授とは対照的に、ワイルドは“truth”や“probability”の不要を強調している。両者とも“truth”という言葉に幅を持たせて用いているため、単純な比較はできないが、その内容面を重視したドイルに対し、ワイルドは「嘘の衰退」で“the secret that Truth is entirely and absolutely a matter of style” (86) と語らせているように内容ではなくスタイルの問題であると断言している。「批評家としての芸術家」では、批評に関して“Certainly, it [the highest Criticism] is never trammelled by any shackles of verisimilitude. No ignoble considerations of probability, that cowardly concession to the tedious repetitions of domestic or public life, affect it ever.” (154) と述べており、“verisimilitude”や“probability”といったドイルの小説の性質の中核をなす概念を否定している。先の手紙で述べていた通り、“truth”や“probability”といった概念を取り払って初めて、高尚な芸術・文芸批評が生み出されるとワイルドは考えていたのである。

ワイルドが、ジャーナリズムへの批判と真実(らしさ)の拒否を文学作品へと昇華したものが戯曲『真面目が肝心』である。ドイルの二作品ほどジャーナリズムに関する言及は多くないが、巧みにジャーナリズムを作品に織り込むワイルドの意匠を見いだすことが可能である。この喜劇は、上流階級をも含む大衆を支配するジャーナリズムを風刺の対象にしていたということはすでに指摘されているところであるが、ドイル作品でのジャーナリズムや「真実」の扱われ方と比較しながら、作品を読み直してみたい<sup>7</sup>。まずはセシリーとグウェンドレンがそれぞれ、アーネストとの婚約関係を主張するシーンを引用する。

Cecily. [*Rather shy and confidingly.*] Dearest Gwendolen, there is no reason why I should make a secret of it to you. Our little county newspaper is sure to chronicle the fact next week. Mr. Ernest Worthing and I are engaged to be married.

Gwendolen. [*Quite politely, rising.*] My darling Cecily, I think there must be some slight error. Mr. Ernest Worthing is engaged to me. The

announcement will appear in the *Morning Post* on Saturday at the latest.

Cecily. [*Very politely, rising.*] I am afraid you must be under some misconception. Ernest proposed to me exactly ten minutes ago. [*Shows diary.*]

Gwendolen. [*Examines diary through her lorgnette carefully.*] It is certainly very curious, for he asked me to be his wife yesterday afternoon at 5.30. If you would care to verify the incident, pray do so. [*Produces diary of her own.*] I never travel without my diary. One should always have something sensational to read in the train. (Wilde, *Importance* 40)

地方紙とロンドンの大衆紙をそれぞれ持ち出して、自身の婚約の根拠を求めている場面であるが、その後、お互いの認識の誤りを正すためにまずはセシリーが自身の日記を、そしてグウェンドレンはその日記の内容を注意深く確認した後、自身の日記を婚約の証拠として提示する。注目すべきは、それぞれ新聞で報じられることになっている内容が結果的に本当のことではないという点である。セシリーが実際に婚約していたのは、アルジャーノン・モンクリーフであり、グウェンドレンが婚約した相手もアーネストではあったものの、姓はワージングではなかった。ドイルの作中では真実を伝える、あるいは少なくともそう期待されていた新聞が、『真面目が肝心』においては「真実ではないこと」を報じる小道具として利用されているのである。さらには、公的な出版物であるはずの新聞に対して、私的かつ恣意的な文書である日記がより権威的に示されていることもあり、ジャーナリズムの価値付けが低く表現されていると言える。

作中ではジャーナリズムだけでなく、その読者である大衆も批判の対象となっている。同時代のジャーナリズム記事に書かれている内容と合わせて台詞を読むと、グウェンドレンは当時のジャーナリズムの読者としての典型的な要素を含むキャラクターであることが分かる。『真面目が肝心』の初演から2年後に書かれた、デイリー・ペーパーの挿絵に関する記事は、その冒頭で新聞の悪癖を批難している。

No one can fail to notice the change that has been coming over the

newspaper [ . . . ]. I do not mean to call attention to the fact that the editorial “we” no longer leads a gullible public; the veil that hid an unimportant personality has been torn away and even the man in the street now knows that the editorial “we” is frequently not of as much value as his “I say so.” Nor yet would I refer to the disappearance of the descriptive reporter, who never could describe anything but his own sensations, which were always the same on all occasions and never worth recording; [ . . . ] or of the critics, mainly appointed to their posts because they were friends or relations of those in authority and nothing better could be found for them to do. (Pennell 653)

グウエンドレンは、この記事で指摘されているようなほとんど意味をなさない“editorial ‘we’”を使用し、価値のない“sensations”だけを追い求めるジャーナリズムを体現する人物として描かれている。彼女がジャックに述べた台詞に“We live, as I hope you know, Mr. Worthing, in an age of ideals. The fact is constantly mentioned in the more expensive monthly magazines [ . . . ].”というものがある(15)。新聞と月刊誌の違いはあるものの、ジャーナリズムから情報を得て、ジャーナリズムと同じようにほとんど説得力を持たない“we”という主語で語り始めている。また、先に挙げたグウエンドレンとセシリーのやりとりの最後で、自身の日記を“something sensational to read”と表現しているグウエンドレンは、“his own sensations”だけを追い求める記者が読者として想定する読者と重なる。さらに言えば、その読み物がジャーナリズムではなく個人の日記に書き換えられていることで、多層的にジャーナリズムを風刺していると読むことも可能である。

グウエンドレン同様、セシリーも特徴的なジャーナリズムの読者としての要素を担わされていると読める場面がある。Rhonda Harris Taylorは、シャーロック・ホームズに関する研究の中で、ホームズは日常の新聞の中の情報を巧みに使用する人物“information literate”であると論じている。その観点から見るとセシリーは、“information illiterate”として描かれている節がある。セシリーとグウエンドレンが口論をする場面で、グウエンドレンの発言に対しセシリーは、次のような発言をしている。

Gwendolen. Personally I cannot understand how anybody manages to exist in the country, if anybody who is anybody does. The country always bores me to death.

Cecily. Ah! This is what the newspapers call agricultural depression, is it not? I believe the aristocracy are suffering very much from it just at present. It is almost an epidemic amongst them, I have been told. (41)

当然セシリーは“depression”という語を両義的に用いた皮肉を言っているのであるが、彼女がホームズのようにジャーナリズムの情報に「真実・事実」を見出し、それを活用する読者と比較すると、セシリーは、新聞からの情報をあえて正しく使わない読者であると捉えることも可能である。

ジャーナリズムが事実を伝え、大衆がそれを受容することが期待されている『失われた世界』や『霧の国』に対し、『真面目が肝心』ではジャーナリズムが事実でないことを伝え、読者もそれをまっすぐは受け取らない世界が展開されており、「真実」の価値が常に揺らいでいる。ある場面でジャックが“nonsense”だと断言することを、アルジャーノンは“a great truth”だと呼び(8)、またジャックが送っている二重生活の事実説明を“improbable”なものにし、とアルジャーノンが言い放つ(10)。“The truth is rarely pure and never simple.”(10)という台詞が表すように、絶えず真実や事実の価値を疑い、それに伴ってジャーナリズム/大衆の虚偽性を浮き彫りにする作品であるといえる。

\*

『失われた世界』という非常にジャーナリズム性を有した小説を書いたが、『霧の国』ではジャーナリズムへの期待を捨てたドイルと、芸術を理解しない、大衆的なジャーナリズムを批評で非難し、『真面目が肝心』においてジャーナリズムを風刺の対象にしたワイルド。絶対的な「真実」の存在を信じ追い求めたドイルと、「真実」を捨て去ることで芸術的な高みに至ろうとしたワイルド。二者の違いをさらに際立たせるために、そして両者の比較研究の足がかりとして、最後に両作家の作品から「嘘」と「真実」に関

する言説を引いてまとめにかえたい。

ドイルの代表作であるホームズ・シリーズ、最後の長編『恐怖の谷』(*The Valley of Fear*, 1914; 1915)で、事件の捜査に取り組むシャーロック・ホームズは相棒に次のように話しかける。“A lie, Watson—a great, big, thumping, obtrusive, uncompromising lie—that’s what meets us on the threshold! [...] So now we have the clear problem. Why are they lying, and what is the truth which they are trying so hard to conceal? Let us try, Watson, you and I, if we can get behind the lie and reconstruct the truth” (Doyle, *The Valley*, Dec. 606). この台詞から、嘘は真実を覆い隠すものであり、嘘の背後にある真実こそが追い求めるべきものであるという、探偵としての強い信念がうかがえる。一方のワイルドは、批評「嘘の衰退」の中で“The only form of lying that is absolutely beyond reproach is Lying for its own sake, and the highest development of this is, as we have already pointed out, Lying in Art. Just as those who do not love Plato more than Truth cannot pass beyond the threshold of the Academe, so those who do not love Beauty more than Truth never know the inmost shrine of Art” (Wilde, “The Decay” 101). と述べている。嘘を突き詰めていくと、真実を超えたところにある芸術の真髄に至るというワイルドの論は、ホームズ/ドイルの発言とは大きく異なる。ドイルの比較的純粋な「真実」「嘘」への認識を慮って、5歳年上の先輩作家であったワイルドは上で引用した通り、ドイルに宛てた手紙で“I throw probability out of the window for the sake of a phrase, and the chance of an epigram makes me desert truth.”と創作の秘訣をアドバイスしたのかもしれない。作家としてこのような芸術観の違いがあるものの、同時にはっきりとした共通点も見出せる。月刊誌「ストランド誌」で“you will judge for yourselves whether the observations I have made justify the conclusions to which I have come. (Doyle, *The Valley*, Jan. 4)”と言って事件の謎解きを始めるホームズ/ドイルと、月刊誌「ナインティーンズ・センチュリー」(*Nineteenth Century: A Monthly Review*)で“An Observation”という副題のついた“The Decay of Lying”を発表するヴィヴィアン/ワイルド。同じ時代を生きた二人の作家は、似通った地点から世界を眺め、異なった形でそれを表現をしたのかもしれない。

\*本稿は、日本ワイルド協会第43回大会（2018年12月8日、青山学院大学青山キャンパス）シンポジウム「オスカー・ワイルドとコナン・ドイル」における発表「文学とジャーナリズムの狭間で」の原稿に大幅な削除、付加、整理を施したものである。

注

- 1 Tim P. Vosが述べている通り、ジャーナリズムという分野・概念は非常に幅広い観点を含むため、定義することは一筋縄ではいかない。本論文では便宜的に、「ジャーナリズム」を「新聞・雑誌などの媒体およびそれらを発行する機関、またその媒体に掲載された文章および付随する挿絵などの情報」、「ジャーナリスト」を「新聞・雑誌などの媒体を編集・出版する人物、またそれらの媒体に（定期的）に文章等を執筆する人物」と定義する。
- 2 Schudsonはジャーナリズムを次のように定義しており、現代のジャーナリズム研究においても、ジャーナリズムと「真実（であること）」が密接に関係していることがうかがえる。‘Journalism is the business or practice of regularly producing and disseminating information about contemporary affairs of public interest and importance. It is a set of institutions that publicizes periodically (usually daily but now with online updates continuously) information and commentary affairs, normally presented as true and sincere, to a dispersed and usually anonymous audience so as to publicly include that audience in a discourse taken to be publicly important.’ (3)
- 3 ワイルドとジャーナリズムを扱った研究としては、Laurel Brakeによる *Subjugated Knowledges* (1994)、Peter Rabyが編集した *The Cambridge Companion to Oscar Wilde* (1997)のJohn Stokesによる論考“Wilde the Journalist”、Kerry PowellとPeter Rabyが編集した *Oscar Wilde in Context* (2013)のMark Turnerによる論考“Journalism”などが挙げられる。
- 4 1890年の手紙の内容を反映したと考えられている *The Poets of Ireland* には、“For many years he [Oscar Wilde] has been connected with some of the leading journals as a critic—notably *The Pall Mall Gazette*.”と書かれており、ワイルドをジャーナリストとしてではなく、数々のジャーナルに投稿する批評家として紹介している (O’Donoghue 259)。
- 5 ワイルドとドイルはほぼ同時期にジャーナリズムと関わりを深めていった。1875年の *Dublin University Magazine* にはアリストファネスからワイルドが翻訳した詩“Chorus of Cloud Maidens”が掲載され (Sturgis 76)、Stonyhurst Collegeに通っていたドイルは、1873年に友人と *Stonyhurst Figaro* というジャーナルを立ち上げている (Pugh 9)。二人が出版文化との戯れを始めたのは、まさに新聞や定期刊行物が激増し、同時に読者層も広がりを見せていた時代である (Sturgis 130)。一方、本論稿では十分に扱えないが、没年が30年ほど開いているために、両作家のジャーナリズム・メディアを取り巻く環境が変

化したことには留意が必要である。変化の一例としては、ドイルは最晩年の1929年、心霊主義について語る媒体としてラジオを用いたことが挙げられる(Pugh 202)。

- 6 *Oxford English Dictionary*によると、新聞・雑誌などのマスコミュニケーションを指す“medium”と霊媒を指す“medium”の初出がほぼ同時期(前者は1850年、後者は1851年)であることは興味深い。
- 7 原田氏の論考を参照。

#### Reference

- Anonymous. “Anecdotal Europe.” *Illustrated London News*, 1 Dec. 1894, p. 678.
- Anonymous. “Dishonest Journalism.” *Financial Times*, 18 Jan. 1888, p. 1.
- Anonymous. “The Tepid Tales of Conan Doyle.” *The Academy*, 24 Oct. 1908, pp. 391-92.
- Brake, Laurel, and Marysa Demoor, eds. *Dictionary of Nineteenth-Century Journalism in Great Britain and Ireland*. London: Academia P, 2009.
- Conan Doyle, Arthur. *The History of Spiritualism*. Vol. 1. Cassell, 1926.
- . *The Lost World*. Ed. Ian Duncan. Oxford UP, 2008.
- . *The Poison Belt and The Land of Mist*. Cambridge Scholars P, 2008.
- . “The Valley of Fear.” *The Strand Magazine*, Dec. 1914, pp. 602-13.
- . “The Valley of Fear.” *The Strand Magazine*, Jan. 1915, pp. 2-15.
- Holland, Merlin, and Rupert Hart-Davis, eds. *The Complete Letters of Oscar Wilde*. Henry Holt, 2000.
- Lellenberg, Jon, et al. *Arthur Conan Doyle: A Life in Letters*. 2007. Penguin, 2008.
- O’Donoghue, David J. *The Poets of Ireland: A Biographical Dictionary*. Hodges Figgis, 1892-93.
- Pennell, Joseph. “Art and the Daily Paper.” *The Nineteenth Century*, Oct. 1897, pp. 653-62.
- Porter, Lynnette, ed. *Sherlock Holmes for the 21st Century: Essays on New Adaptations*. McFarland, 2012.
- Pugh, Brian W. *A Chronology of the Life of Sir Arthur Conan Doyle*. MX Publishing, 2018.
- Sharp, Luke (Robert Barr). “Detective Stories Gone Wrong.” *The Idler*, May 1892, pp. 413-24.
- Schudson, Michael. *The Sociology of News*. 2nd ed. Norton, 2012.
- Sturgis, Matthew. *Oscar: A Life*. Head of Zeus, 2018.
- Taylor, Rhonda Harris. “A Singular Case of Identity: Holmesian Shapeshifting.” Porter, pp. 93-112.
- Wilde, Oscar. *The Complete Works of Oscar Wilde: Criticism*. Ed. Josephine M. Guy. Vol. 4, Oxford UP, 2009.

- . “The Critic as Artist.” Wilde, *Complete*, pp. 124-61.
- . “The Decay of Lying.” Wilde, *Complete*, pp. 72-103.
- . *The Importance of Being Earnest: Authoritative Text, Backgrounds, Criticism*. Ed. Michael Patrick Gillespie. Norton, 2006.
- . “The Soul of Man.” Wilde, *Complete*, pp. 231-68.
- Vos, Tim P., ed. *Journalism*. De Gruyter, 2018.
- Wong, Amy R. “Arthur Conan Doyle’s ‘Great New Adventure Story’: Journalism in *The Lost World*.” *Studies in the Novel*, vol. 47, no. 1, 2015, pp. 60-79.
- 河村幹夫『評伝コナン・ドイルの真実』かまくら春秋社、2018。
- デュトゥール、ジャン『ワトスン夫人とホームズの華麗な冒険』1980 長島良三訳、講談社、1982。
- 原田範行「ワイルドとジャーナリズム」富士川、『オスカー・ワイルドの世界』、pp. 401-23.
- 富士川義之ら編『オスカー・ワイルドの世界』開文社出版、2013。